
瞬花終答

銀色捺夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瞬花終答

【Nコード】

N2202D

【作者名】

銀色捺夜

【あらすじ】

万屋「ヨロズヤ」をいとなむ切鐘夜子「キリガネヤコ」の下で働く、浅田南月「ナツキ」、彼の任務を描く短編。

1 (前書き)

1日1回更新予定

「アア？」

奇妙な寄声を発する男が前にいる。

俺にむける敵意の現れだろうか

それとも

恐怖からの威嚇だろうか

まあそんなの

「霧島 宗 だな」

どうでもいいが。

日付がかわったのにも関わらず、都会の中心は活発だった。

酔いつぶれる上司らしきものをささえる者

呼び込みの艶めかしい女やスーツの男。

無尽におもえるような風俗店の数。

その誰も彼もが俺を、訝しむ眼でみている気がする。

気のせいではないだろう。

確かに、学生まんまの姿の学生が警棒もってこんな所歩いてたら、自然、そうなる。

事務所に向かうだけのおれにとってはきをつかうだけ無駄だ。

そう割りきったら、あとは警察にあわないか、不幸にも、いや愚かにも俺に楯突こうとする物が現れないように、多少念じるだけだ。

仕事の完遂を報せるために、俺は足取り普通に、夜だけ営業するその事務所へあるくだけだった。

なるべく静かに門番に立つスーツの男に目で挨拶し、ゆっくりと階段をあがる。

limeというホストクラブの上にある事務所はクラブのフロアを一つ貸し切ったかたちであり、革張りのソファもレトロな絨毯もほの暗い照明も、ドラマの探偵のそれとは程遠い。

少し重たいドアを開け、中に入る。

そんななかで、この事務所、もとい万屋の中心に腰掛ける女性が切鐘 夜子 だ。

俺は夜子の向かいに腰掛ける。

夜子はやわらかなブラウンの髪をすきあげながら、その白い足を組みなおす。

紅いドレスを着た彼女は、その彼女自身の美しさと合わさり、こちらの女のものとは比べられないくらいだった。

大人の女、とはまさにこの女みたいな奴だろう。

そしてそんな彼女のためのように、吸いかけのタバコと灰皿、後は血のような赤いワインが雰囲気にあったガラスの華奢なテーブルの上に置かれている。

「飲むか？」

紫煙をはきながら夜子が問う。

「未成年だからな。俺はいい。」

彼女は口だけで笑い、そうだったなとあいつつ。

「桐島、依頼通り二度と遊べないように体に刻み込んできた。」

一応そういう依頼だったので、報告はしておく。俺達は万屋。頼まれた依頼は何でも聞き請け負う。

今回も、暴行やオヤジ狩りに明け暮れるガキの一団のリーダーに恐怖を刻んだだけだ。

依頼主はたしか、犠牲になっていたオッサン

しかし夜子は引き受けた依頼に興味など微塵もない風に、そうかとだけで終え、煙草をふかす。

会話も尽きたので

何気なく俺は夜子を自然と見んでいた。

彼女の起伏の著しい体はみてるだけで、十分な暇つぶしだ。動作動作が誘っているのかと思うほどの妖しい動きは、よほど興味がない奴でなければ、抑えられないだろう。

まあ彼女に手を出しても、本当に殺されるだけだろうか。

夜子は俺のなぞるような視線も理解した上でほおっておくようだ。

要するにどうでもいいのだろう。

俺はどうやら機嫌が悪いらしい無口な彼女をおいて、席をたつことにした。

「帰るのか？」

どうしてもよさそうに彼女は、微睡んだ視線でこちらを見る。

「ああ、浸つてるところ邪魔すんのは悪いからな。金は振り込みでいい。わすれんなよ、夜子。」

俺はそれだけ言うと、そのまま事務所をでた。

私、前園 雛にとって今日はとっても楽しい日でした。理由はとてもささいなこと。他のひとに聞かれたらばかにされるようなことかもしれない。

何故なら私はただお友達と遊んだだけだからです。

本当にありふれたことだけど、家の厳しい私にとって、この外出はお父さんが許してくれた久しぶりの機会なので私は一番お気に入り
の白いワンピースを着ていきました。

お友達と過ごせたその時間は本当に大切なものでした。

知ってる。私はこの時幸福な気持ちだった。

お友達と別れた後、私は少し遅くなってしまった中を歩いて帰るこ
とになりました。

夜の街は、忙しくうごいています。

行き交う人達もとても急いでいる様に見えます。

私もそれに急かされように歩を早めました。

知ってる。私はこの時胸騒ぎがしたんだ。

私はビルや色んな建物の下をあるいてきます。郊外にある私の家の方向はだんだん人通りが少なくなってきました。

男の人が後ろから何人かついてくる。ガラスの悪いその人達は、白いワンピースを着て歩く私の後を嫌な笑いを浮かべながらついてきている。

でも、私はその光景を知らない。

だって見ていないから、

今後ろが分かるのは、きっと、ここは脚色した世界の中だからだ。

つじつまは合うように最後は同じ結末にたどりつくはず。

賑やかだった通りを抜け、私は少し寂しい道へ出ました。昼間は豊富なお店が並ぶここも今はシャッターが降りていて、とても心細いです。

知ってる。けれど

けれど、後ろに人の気配があるのがわかったので私安心して、歩きました。

知ってる。何も知らなかった私は、この時怖かったのは、お化けと幽霊だけ。

本当にそんなものしか、怖い対象をしらなかつたバカだった私。後ろからは、さっきよりも近い距離に、男の人達がいる。相変わらずの嫌な笑み。

だけど、その私はまだそれを知らない。

私は、横断歩道で止まります。信号を待っていたら、向かい側に変わった人を見ました。

その人は、ジーンズに体にぴったりとあつた白いＴシャツをきています。女の人にしては飾り気のない服装でしたが、緋色のとても綺麗な髪をしていました。

外にはねる髪型もその人によくあつていような気がしました。

そして彼女は、とても、とても冷たい目をしていました。

思わず、目を奪われました。

信号が変わると、彼女はさっさと通り過ぎていきました。

知ってる。私はその女性を覚えている。緋色の髪もそうだけど、あの氷のような瞳が焼き付いてはなれないから。

その通りもぬけると、私は大きな森林公園に入りました。

知ってる。私はそこで振り返るのだ。

やっぱり、一人で歩いてると、寂しいです。

私は公園に入っても後ろから人の気配がするので、思わず振り返りました。

知ってる。そこには怖い人たちがいた。

後ろには、若い男の人達がいきました。

それを見た途端、私は急に不安になって、すぐに前を向き、せっせと歩きます。

気がついたら、私の中にあつた幸福な気持ちはなんにも、なくなっていました。

これはどっちだったんだろう？

この私の中で幸福な気持ちが消えたのは、男の人達を見てからだろ
うか、けど、いまの私は思います。

私の中で幸福な気持ちが吸い取りきられてしまったのは、あの、震えてしまいそうな冷たい目をみてからだということ。

今、私は不安で不安で仕方ありません。

知ってる。

このあと私は少しだけ悪夢をみる。この世界は私の思いどおりに脚色できるのに、私は最後まで結末を見守ることにした。

大丈夫。苦しいのは最初だけ。

最後はきつと嬉しくおわれるから。

私は急いで歩いていましたが、目の前に一人男の人が、ぬっと出てきました。

とても驚きましたが、私は私を押し殺して、進路をかえて歩きます。けど、その方向も別の男の人に塞がれます。

嫌な笑いをしながら、私をみおろします。

私は急いで後ろへ走り出しますが、その方向には男の人達が数人いました。

走り出せず、私はそのばに立ち往生してしまいます。

もうパニックで、泣きたくて、何が何だかわかりません。

周りを見ると高揚した感じの男の人達は私にどんどん近づいてきます。

「ねえ、キミ。俺達と遊ぼう？」

一人が声をかけてきます。

「イ、イヤです。」

私は、かすれる声を絞り出し、その人の横を抜けようとしています。けれど、別の人がまた、邪魔をしてきます。

「そんなこといわずにさ？ね？」

嫌な笑いに囲まれて、気がついたら、私は人気のないところまで誘導されていました。

「ね？遊ぼうか」

そう言つと、私は地面に押し倒されました。

「イヤ！やめて！」

へへと男の人達は、私の声には耳も傾けず、両手を抑え、そしてお気に入りのワンピースをやぶつてしまえます。

私はそれが

「本当の怖い」だと思いました。

私は声もでなくて、たぶんあきらめて、この人達に汚されると

思っていた。

そのとき

私の服を破く、男の人に誰かが、声をかけました。
涙でぼやけた視界でわたしは誰が現れたのかわかりません。

「おい。」

「アア？」

「桐島 宗 だな」

そういつて、誰かが私に覆い被さる人を、吹っ飛ばしてしまいました。
た。

そうして私を助けられました、ゆっくり見えるようになった視覚
のなかに、現れたのはクラスメートの、男の子でした。

そこまで見ると、私の世界はぼやけていく。小さく、目覚まし
のアラーム音が聞こえる。

私はどうやら夢から醒めなくちゃいけないみたいだ。
久しぶりに見た、遠いおもいでを観て、私は目をさました。

朝の日差しが眩しい。

結局、夜子の店から、帰ったあと、そのまま眠ってしまったようだ。夏に近づいたこの季節。

蒸し暑い気温は不快だ。

だれていたソファアの横に、昨日使った警棒がある。

それをソファアの下に隠すと、昨日の無理な行動をとまなわせた体は、フラッシュバックした記憶で、また震えていた。全く、使い物にならない容れ物だ。

俺が望んで入った世界なのに、たった昨日のことだけで、俺はこんなに怯えている。

夜子に雇われて、数週間。

こなした依頼はわずか3つ。

どれも、命の危険は伴わない軽いもの。

でも俺の体は勝手に震える。

あの時以来、虚像と実像のようにわかれた俺は、割り切ってしまう。まばたく間に全てを抑えられる。

その気になれば、昨日のカスも、なにもかも、ひびることなく簡単にこわせる。

何も怖れない。

と念じさえすれば、壊れてしまったオレの脳はおもった通りに震えも簡単にとめてしまう。

精神変革者

それが俺。

頭の中の理性と思考、精神を司る、海馬と前頭葉の以上発達。

自分でスイッチを切り替えればいつでも、俺は精神変革者としての思考能力と精神力を手に入れられる。

だが、俺はそれを使いたくない。

人間という証を保つためには、その力を使えない。使ってしまったら、きっと全てに絶望する。

壊れた人間になってしまう。

何でもできる人間は退屈して、やがて狂気に走るから

一度だけ、スイッチをきりかえたことがある。

あの時手に入れた、万能感と、思考したことをやり遂げてしまう、虚無の精神力は、俺を何も持たない、全を侮辱する人形に変えてしまっ。

だから使うのが、怖い。

だから慣れるのが、恐ろしい。

だから、俺は強くならなきゃならない。

私は、ふわふわの羽毛のふとんのなかでゆっくりと伸びをする。
しんとくる冷氣、12月の空気は、秋の名残もなくなって本格的に
寒い。

目覚めのよく起きた私は、早く学校に行きたがる。

「うっさむいっ」

でも今日は最後の日なんだから、せめて、いつもとおなじように
過ごそう。だから私はいつもと同じ言い訳をして、いつもと同じよ
うに、二度寝する。

少し、悲しいけど、南月くんや夜子さんともお別れだ。

あと、切鐘君やミキちゃんとも。

私は今日、いろんなことであわせてくれた南高校を転校する。

俺は、とりあえず学校へ行くことにした。

シャツだけ着替え、袖をまくる。

ワンルームのマンションに一人暮らしなので、俺の部屋は散らかり放題だった。

タンスとテレビとソファー、散乱するゴミと服。

さすがに汚い。

面倒だが、帰ったら掃除をしなくては行けないよいだ。

鍵をかけ、学校へ向かう。

俺の通う学校は、そこから徒歩十数分のところにある。

バカみたいに子供が大切に、かつ金に裕福な家柄のものだけが通っている私立の学校だ。

無論、俺の両親も例外ではなかったから、こんな所にいれられた。だが、金だけおいて消えてしまったそいつらはどこにいるのかさえ分からない。

愛想をつかしたのか、やむ得ない事情からか、それすらも分からない。

変わりに与えられたのはある意味の

「自由」を残して、両親と元の家はキレイサツパリこの町から消えたのだ。

しかし暑い。登校するわずかな道のりでも、汗が滲み出てきそうだ。

登り坂というオプシオンもあり、この行程はかなり不快な部類だ。

そうしてなにも考えずに進んでいると突然　あの、と声が出た。

振り返ると、南高の特徴的な黒いブレザーをきた女生徒がいた。

彼女自身も、絹糸のような長い黒髪と、雪に溶け込めるような肌は

白黒のコントラストを余計際立たせていた。

さらに彼女の危うい、俺なりに言ったら、脆そうな印象は、庇護欲がでるような、相手だ。

そいつは、声をかけたが何を言おうか迷い、歯切れが悪そうにしろもどろになっている。

振り返り、返事もしない俺も悪いかも知れないが、俺に話す用はない。

それにこの女を知っている。

何より、昨日の夜あれを会っているといいか解らないが会っているし、クラスに同じ奴がいた。

次の言葉をまっっていると緊張した面持ちで話し出した。

「あ、あの！わ、わ、わたし！前ぞ

「知ってる。前園 雛 だろ。」

「あはは、そ、そうですよね。」

同じクラスだろ。かるくいって要件をただす。

「で、何？」

彼女はキョトンとして、しかし思い出したように慌ててしゃべりだした。

「えと、その、南月くん！昨日は」

前園は息を吸って、言葉をつなぐ。

「昨日は、ありがとうございました。」

そして彼女は、丁寧におじぎをする。それでいっぱいいっぱいといった感じの前園は俺が喋るまで、頭をあげそうにもなさそうなので助け舟をだす。

「いいよ、別に。お前は運がよかったただだよ。」

もともとあいつは壊す予定だったしと付け加える。

前園は、顔を上げる。

「あの、それでも、ありがとう。」

彼女は優しい笑みでそれだけ言うと、学校でまた、と小走りでもと来た道をもどっていく。そこには高級車と付き人がまってるあたり、かなり裕福な家なのだろう。

走っていく後ろ姿は、さらさらと流れるかみと、前園の少女らしい雰囲気、多少、爽やかな気分にかけてくれた。

車に乗り込む前に、前園は一緒にのっていきますか？、と行ってきたが俺は片手で遠慮を示し、彼女が乗り込むより早く、また歩く。

暑さのせい、ととうとう発汗しはじめた。

通り過ぎていく、黒塗りの車を眼で、追っていく。
前園は、わざわざ俺を見つけて車をとめたようだ。
律儀な奴。

俺は半ばあきれがちにそう感じた。
確かに、昨日アイツを助けた。

でも、それだけだ。
偶然でしかない。

前園を襲った男は、俺の目的だっただけ。

最初から奴らをつけていたし、奴らに狙われている女がいたことも知っていた。

夜の公園に入ったその集団をみた時、俺は事が終わってから、目的を達しようとおもった。

そうだ見捨てるつもりだった。

つまり、桐島 宗 が一人になった時始めて、奴を壊すつもりだった。

助けたのは本当に偶然。何がそうさせたのか分からないし、知りたくもない。

ただ、心がぐらりと変わり。
自然、肩をつかんだ。

本当、どうでもよらさそうに。
そう、だから俺が助けたのは、気まぐれなんだ。

そう、結論し終わるころにちょうど、校門前についた。

豪勢な私立校は、丘を丸ごとを敷地として、近代の洋館がそのまま巨大化したような作りの校舎を持っている。校門から入っても、まだ本館まで200mほど続く舗装された通路、もちろん清潔感のあるサツパリとした道の両側には芝生、そして豪華な建物が左右対称に林立している。

そしてこの校門は、生徒を送る車がわざわざ入りやすいように作られ、円の形をとっている。中心には噴水もあり、とても高校には思えない、間取りだった。

まったく、美術館やアトラクションに間違えられても仕方のないつくりだ。

俺は見慣れたそれをサラッと通りぬける。

校舎へつづく道をつなぐ、ちよつとした凱旋門が

俺を嫌そうに歓迎した。

教室につく頃には、すでになかは、生徒で埋まっていた。

7月が近い季節、俺と同じようにワイシャツだけのやつもいる。そんないつもと変わらないつまらない風景を視界にいれながら、なるべくゆっくりと定位置へ歩を歩める。

もともと、人と話すことも馴れ合いも好まずやってきた。

していなかった俺は学校で完全に不良の扱いをされていた。

そして話しかけてくる分は構わないが、面倒なので冷たくあしらう。という元来持ち合わせる性格が余計に人をとおざけているのだろう。

おかげで俺の周りはいぶ落ち着いた。

しかし、一件手伝い、俺は隣の席の女、前園雛に尋ねることができてしまった。今日は気が滅入りそうだ。

いなかった俺は学校で完全に不良の扱いをされていた。

そして話しかけてくる分は構わないが、面倒なので冷たくあしらう。という元来持ち合わせる性格が余計に人をとおざけているのだろう。

おかげで俺の周りはいぶ落ち着いた。

しかし、一件手伝い、俺は隣の席の女、前園雛に尋ねることができてしまい、今日は気が滅入りそうだ。

窓側の一つの机、前園は糸でつるされたぐらいに、綺麗に座って、予習用らしきノートを見直していた。

俺はそのすぐとなり、座る。

俺は少し鬱になりながら、隣に座る奴を見た。

すると、同じくして前園もこちらをみてきた。

が、前園は慌てふためきました、前をみる。何て挙動不審な奴だ。

俺は構わず話す。

「なあ、今日帰り。」

彼女はどごその犬のように眼をまたたかせる。その瞳は、私ですか？と訴えていたから、そうお前だ。と目でかえす。

「前園、今日は一緒にかえるぞ。話したいことがある。」

へ？

とその場の雰囲気さがさつと変わる。

前園は予想通りの反応。しかし、その近くにいた奴らまでもが、驚き、こちらを観る。

俺は驚嘆するそれらを眺め回す。

南月の視線を恐れた彼らは、またササツとともに視線はもどる。しかし、それでも野次馬達の好奇心は消えない。

それも当然。南月は、学校はサボるし、郊外では悪い噂が、ほんの数ヶ月前まで絶えることのなかった。不良。

対して声をかけられた前園 雛 は、ホケっとした雰囲気、どんなに苦手なことにも努力する真面目、人を疑うことを知らないような純真さをもちあわせている。おまけに容姿端麗。クラスでの人気もある。

南月とは、ほぼ両端に位置するような相手だけに聞いていた野次馬達は、素早い伝言でクラスの奴らに情報をひるげ、今は南月と前園

雛 のやりとりにクラスが耳を傾け、注目していた。

そして前園 雛 はその言葉の理解するのに十分な時間をつかい、意図をなんとか汲み取り、頬を紅潮させてコクンとうなずいた。

みた生徒は驚き、そくざに伝わっていく。

南月君が前園を誘ってるぞ！ まじかよ！何に？さあ、分からない。雛ちゃんに浅田君が告白してる！ウソ！

とデタラメに広がっている。

南月はその声に気付いても、かえって誤解されてたほうが助かる。と無視する。

一方は、複雑な心境でただ緊張して固まっていた。

これが浅田南月 と 前園雛の始まりだった。

「行くぞ」

「は、はいっ。」

学校が終わると俺はすぐに教室を前園とでる。好奇の目も浴びせ浴びせられたが、無視する。ほどなくして、俺達は街まで歩いていく。

学校は比較的、中心地の近くにあるから歩く距離も苦にはならない。結局、教室をでてから終始無言。前園の緊張はいつこうにほどけないので、後ろをかちこちと歩く彼女に話しかけた。ちょうど朝にあつた場所。

「お前、迎えば平気なの？」

「あつ！はい。えと、お母さんには、寄り道をしていくと伝えあるから、平気です！」

寄り道を許す。ということは彼女は昨日のことは親にも話していないらしい。

「ふーん。……にしてもあんた見かけによらずタフだよな。今日はてつきり、学校にも来ないと思ったよ。」

返事はない。

しかし、これは素直な感想だ。

昨日、見知らぬ男らに陵辱されかけたばかりなのだ。その傷が1日

やそこらで癒えるわけがない。

なのに前園は、その恐怖を親にも打ち明けない。心配させたくないと思うこともあるのだろうが、彼女はたしか、親が世界的一流企業の社長、言えば途端に前園の今のこの生活は崩れるだろう。だから彼女は、恐怖を抱いてでも、今の自由を選んだんだ。

だから、何も表さず振る舞ってきた前園を俺は、素直に驚いていた。

「タフなんかじゃないです。」

彼女がゆっくり喋りだした。

「私、本当はこわいです。」

俺は立ち止まり、振り返る。前園は今にも泣きそうなのだが凜とした表情でこちらをみていた。

「でも、あの、南月君が助けてくれました！えと、だから、あの……

平気です。と顔を伏せていった。

ただ事務的に、こちらの仕事を漏れないように口止めだけする予定だったが、気が変わった。

俺は歩きだす。

彼女は動かない。

もう一度振り返り、俺は言った。

色々話すよ。よかったらついていい。

不器用にそれだけ。

歩きながら、俺達は話した。

なぜ俺があそこにいたか、仕事だったこと、万屋をやっていること…

「ヨロズ…ヤ、ですか？」

「そう、いわゆる何でも屋だよ。頼まれたら何でもやる。…まあ俺も入社したばかりだしな。」

「なんか、すごいですね。」

「たいしたもんじゃない。」

「でもかっこいいじゃないですか？」

そうか？

と話す。

前園も最初に比べたら大分自然体になっていた。

ただフラフラと歩いているだけで時間は過ぎていた。空は茜色へかわり、そして藍色に変わっていく。

結局どこによるでもなく、前園の家の前まできていた。

「今日はたくさん話せてよかったです！」

前園は笑顔で言う。

「ああ、あと今日話したことは秘密にしてほしい。」

「…はい。」

確認した後、俺は歩きだす。
しかし、前園の声で立ち止まる。

「今日、ありがとございました。心配してくれてたんですよね？
私嬉しかったです。」

俺は…心配してたのか？自分でそんなことは気にしてなかったが、
ああ、確かに心配だったのかもしれない。

「俺、万屋。だからなんかあったら、すぐに助けてやるよ。何から
でも、どんな時でも」

「金次第で」

前園が笑っているような気がしたけど、気にしない。
俺はそのまま、夜子が待つ仕事場へ向かう。

最初は、何が何だか分からないままだった。

ただ、手が真っ赤。

床も真っ赤。

目の前には真っ赤な肉片。

バラバラに千切れたら、それは綿でできた人形みたいだ。
ただ軽くちぎっただけなのに簡単にさけて壊れてしまう。

その壊すことが楽しくて楽しくてしょうがない。

薄く満足にその肉片を見下ろす。

思い出した。これが最初の殺人だ。

血のように紅い髪をした少女は、口を歪にゆがめる。

彼女は浅い記憶の中で、それを思い出す。

あそこから変わってしまったのか。

それとも変わることができたのか？

分からない。

1つ分かるのは、今は人を殺してしまうことだけが生きがい。唯一の生きる喜び。

だから、彼女は殺し屋になった。

静かにあとをおう。

桐島は白い服の少女をおつて森林公園の中にはいっていく。
俺は腰にさしてあつた警棒を抜き、後を追う。

南月は緊張と恐怖を表に出さず、ただ

「やる」ことだけを体に念じる。

自分の弱さを出さないためにする行為。

あえて自分を追い込み、そして耐え、乗り越える。

彼が課した自分への代償。

やめればたちまち彼は己に負け、やりたいがままに動く。ただ自分

のため。ただ快樂のため。ただ

「やる」ため。

脳の海馬と前頭葉の異常発達。

思考能力、感情、精神力このコントロールの爆発的強化。

故に南月が

「勝つ」と言つたら必ず

「勝つ」まで何があるつとやめない不屈の精神。

故に南月が

「怒り」を感じようと思うならば

「怒り」を感じる超常的感情管理能力。

故に万人と同じ命題を問われたら、人々が一の答に達するあいだに
瞬間的に百に達する、脅威的思考能力。

それが、彼の力であり、頼れないものだった。

頼れば、彼は依存することを知っている。やりたいことをやり好き勝手に生きることを理解している。

そして、万物に飽きた先を彼は知っている。

狂気に走ることを解っている。

だから、力を使わない。

だから、力を使おうとしないための精神力を求めている。

心がぐらりとゆれて、南月は歩む。

あまりに自然な足運びに誰も気付かない。

そして、南月は肩に手をかける。

桐島 宗 だな

アア？

突然名を呼ばれ、少女を襲う男たちは振り向く。行為を邪魔されたことに苛ただしげに、少女は涙をつたう顔でぼんやりと見る。

そして、中心にいた男が桐島と確認した瞬間。

彼は警棒を握り直し、鼻っ先めがけて腕を振り切る。

突然の攻撃に反応ができるわけがなく、桐島は無防備に直撃し、あつというまに呻き転がりのたうつ。

仲間は、驚き、啞然。

南月は間髪いれず、右手にいる少女を押さえていた男の髪を掴み、

引き寄せた反動で膝を押し込む。
鈍器で殴られたようになった男もそのばに倒れこみ、ショックと脳
への衝撃でそのまま失神。

テメエ！何しやがる！

追いついた思考でやっと残りが動きだす。

南月はスイッチを切り替えていない。故に、震え、しかし必死にそ
れを抑え、全力で目の前に取りかかる。

これで2人。…のこり、二人、か。

南月は軽く息をすい、後ろへ走る。

森林公園のかでも、とりわけ狭い茂みから、ひるまは子供たちが遊
ぶ、中心の広場にでる。

興奮状態にある、残り3人は当然追いかける。
少女を残して。

南月は、走る速度を緩め、あえて先頭を追走して来るものに追いつ
かせる。

そして、十分距離が近づいたら南月は急激に止まり、警棒を腹にめ
りこませる。

フオ…

男はそのまま倒れ悶絶。おそらくアバラが何本かいったらう。

南月は少し乱れた息を整えながら、広場の中心で追いかけてくる者
をみる。

大丈夫。できる。

南月はもう一度、心に刻む。

きつと、切り抜ける！

「さあ、残り2人だ。」

息をだすついでに紡いだ言葉と同時に南月はもと来た道に向かい疾
走を始める。残りの奴らとの距離は約15m。

50m走6・9sの普通過ぎる疾走が緊張と恐怖を抑えて、ゆれな
がら迷いなく走っていた。

南月は持っている警棒を投げる。距離は5m、対角線で走っていた前方の男は反射で顔を庇う。

自然、得物は弾かれる。

だがそれが狙い、南月は姿勢を低く、視界がなくなり無防備な男に殺人的角度で懐に体当たりをする。

男は、声もでないまま後ろに滑り倒れる。

ラスト！

南月は素早く体勢を立て直し、最後に走ってきた男に向き直るが、

ヒイヒイヒイ

男は腰がぬけたみたいに慌てて反対方向に走っていった。

その男が見えなくなり、気がつけば、身体全身は鉛みたいに重く、疲労感でいっぱいになっていた。よっぽど、神経を集中させていたのだろう。

俺は警棒を拾い上げ、まだ倒れている男たちを背に帰途につく。

痛みに呻く、奴らの声を聞いても罪悪感はなかった。しかし、こんな大勢をまとめて相手にした自分を今更ながら後悔する。

そう、俺はただの人間。脳が多少発達している他は一般人の何ら変わった能力差はない。

だから下手をしたら簡単にやられて、今地面に倒れふしていたのは俺だったかもしれない。俺だ。

自分の無謀さに呆れて歩く。

淡い月の光と、いたわりをしらないような真っ白な蛍光灯が暗闇を

ほんのりと照らす。夏に向かい始めた肩から力がぬける。
全部終わったと思つたら、体のあちこちが急に重く感じた。
俺は警棒を拾い、そのまま帰途につく。
あ、忘れてた。

そつだこんな無茶したの理由があつた。

俺は振り返つて道をもどる

ことは出来なかつた。

前に立つものがある。

鼻からの血で顎まで赤く、ボサボサになつた金髪、桐島 宗が立
ていた。

先ほど違つのは、片手にもたれたバタフライナイフ、そして気迫。

生命の危険がなかつた仕事は、己の甘さで殺す覚悟を持つ者との命
賭けのものになつた。

殺す覚悟。といっても今の桐島にあるのは突発的なもの。相手を殺害してその時に始めて正気にもどる、この場合は俺が死んだ場合。

南月はゆっくりと距離を空ける。

クソツ！自分の甘さに本当に呆れた。桐島は鼻を折っただけ、十二分に次反撃がくるのは予想しえたことだ。

徹底的にやらなかったのは、中途半端な同情と早くここから逃げ出したがる気持ち。

なんて、愚かな。

しかし、悔やんでも始まらない。

冷静になれ。ありっただけの集中力をたたきつける。たかが5人に勝っただけで舞い上がる。そんな愚かな俺を消す。

培ってきた精神力は、不安定ながら、それを可能にする。

もちろんスイツチは切り替えていない。

桐島は汚く闘争本能丸出し、いつ突っ込んできてもおかしくない。

一応俺はただの人。殴られれば痛いし、刺されれば重傷もしくは死、身体能力で飛び抜けた部分はない。

あるのは、使えない力とそれを抑える為にある精神力。

さあどうする。逃げるか？

相手はナイフ、こっちは鉄の棒。しかも相手は玉砕覚悟めいている。例え、喉潰そうが、目を潰そうが、必ず俺に一撃いれてくるだろう。となると、やはり逃げるのが妥当。

冗談。

俺は鼻で笑い、桐島にしつかり向き直る。

ここで逃げたら、この世界にはいった意味がない。俺が求めたのはこれなんだ。

体の神経という神経を張り詰める。

命を賭ける。

初めてのことに。

筋肉が強張る。

体を冷静に務める。

生き残る。

違う。

逃げる。

違う。

勝つ

心は決まった。

俺は重心を中心に預ける。

無論狙うはカウンター！。

突っ込めば相打ち必至。なら後の先をとるのみ。

今は自分を信じる。

警棒のグリップを逆手に持ち替え、そして起爆剤を投げかけた。

「来いよ、クソガキ。ビビったか？」

それだけ。

それだけが桐島は目を見開き、あるのは怒りだけ

「調子乗ってんじゃネエエエ!!!」

完全に冷静さを失わせ、予想通り桐島が走りだした。刃物の銀色を漂わせながらの俺しかみていない突撃は猛牛を彷彿させる。2秒後には決着のつくそれを、気が遠くなる思いで待った。

単純な刺突、しかしその刃は南月めがけ迫る。

桐島は叫びながら、両手でしっかりと握り締め走る。

距離は1mあるかないか、タイミングは完璧だった。

銀の閃光が、南月をギリギリ数センチまで近付く。

南月はしっかりとそれを感じる。もはやコンマの世界、視覚よりも己の直感と自信に委ねた。

早く避けすぎれば軌道修正されアウト、遅すぎたら刺されて終わり。恐怖はなかった。

そしてナイフが服を掠める寸前、南月は右に流れるように体を半身ひねり、肩がぶつかってくるくらいの距離でよけた。

正確には瞬発的な動きではコレが限界。後一步分下がりがつたが文句は後でいい。

横切っていく桐島にさらに腕の反動を利用して体を半回転させ、後頭部に渾身の一撃を見舞う。

遠心力ののつた一撃は意識を刈り取るには申し分なかった。

桐島はそのままだらしなく前のめり倒れ、俺は回転のバランスを崩ししりもちをついた。

額から汗がでる。無意識に、息もとまっていたようだ。

桐島は動かない。本当に、勝利を確信して土埃をはらいながら立ち上がる。

そしてまた忘れる前にさっさと歩きます。

俺はもう転がる男には目をむけず、狭い茂みの中に入る。

ほどなくして、人の姿が見えてきた。あちらも気付いたようだ。不思議にも女は騒ぐようすなく俺を見ていたまるで何かを確認するみたいに。

その視線を無視して泣く女に近付く。

すると次第にハッキリとした輪郭がみえてきた。そして、誰かわか
った。

「あ、」

何というか

「前園…雛…？」

偶然にも助けたのはクラスメイトだった。

日はとつくに沈んだ。

ただ風景がつながれている。

完全に日が沈み、街は人間のせわしないあかりと動きだけ、自宅へ歩く者も夜遊びに働く者も、まったく他人に興味はない。

前園と別れてから、俺は余分な回想をしていたようだ。

勝手に足は進み、後数分で事務所へつくだろう。せつかくだから続きを思い返す。

俺は着ていた学校指定のワイシャツを脱ぎ、長い黒髪の中刻みにゆるる前園の服が破れ、むき出しになった白い肩にそつとかけた。勿論俺はタンクトップを中に着ていたから、裸になったわけじゃない。

前園は俺のボタンを外す動作にかなり警戒したが、何もしない。

彼女が泣いて俯いたままなので、助けた手前見捨てられず、となりに腰を下ろした。周りを見渡すと草木で覆われたここからじゃ空も見えない。それに人目につきにくい場所だ。俺は警棒たたみ腰にさした。前園のすすり泣く声だけが空間に響く。俺はこういう場合何を言えばいいか分からない。知りたくもない。だから黙って傍らにすわるだけ。

そして、数分。

「…落ち着きました。」

彼女は涙の後がハッキリついた顔で笑いながらこちらをみる。精一杯の表現だろうが、笑えていない、むしろ泣きそうだ。

「…帰れるか？」

「……ハイ」

「送ってやる。」

「……ハイ」

俺は前園の手を取り、エスコートするみたいに丁寧なもんじゃなく雑なものだが、それで立たせた。

握った手は細くてやわらかい、力をいれたら折れてしまいそうだ。俺はできるだけ弱くその手をひいた。前園は素直についてくる。後ろをみるが、俯いているのでどんな表情かは分からない。

破れた服に大きいシャツを羽織る少女、その手をひき遠慮なく進む男。

それはどこか滑稽で、好奇だった。

公園の外側に来る。この敷地は街の真ん中にある。たしか

「都市の中にも緑を」とかいう下らない開発事業でつくられた。遊歩道と中央に広場だけというつくり。円形をえがきながらあるので一度円からでればそこには反対側には商店街、そして今俺達が立つ方向はそのまま中心街につながる。

なるべく前園をかばいながら、タクシーをひろった。

運転手は胡散臭い目でこちらを見たが、好奇心が勝ったように俺達を乗せた。

「どこまで行きますか？」

前園の家を俺は知らない。したがって彼女に答えを促すが、やっぱり帰りません。と言った。

訳が分からない。

結局頑なに家の場所を言わなかったので、仕方なくタクシーから降りた。

そして公園に戻り、遊歩道の脇にあるベンチに座る。目立たないように、あえて蛍光灯のあたらない所も選んだ。30cmほど離して座った。

相変わらず、前園は俯いたままだ。

涙の跡がすっかり残った横顔はまだくらかった。

だからといって俺もずっと一緒にいるわけにはいかない。

夜子に報告もしないといけないのだ。

俺はもう一度だけ、前園に何故帰りたくないのか聞くことにした。

さっきは運転手に聴かれたくなかったかもしれない。それでも、もし言いたくないなら、その時は知るものか。

感情のこもらない声で言う。

「何で帰りたくない？」

草木を挟んで車の通り過ぎる音が聞こえた。

すぐそこは街なのに、騒音はそれぐらいしか聞こえない。

ゆっくり、唇が動く。

「秘密にしないといけないんです。」

一拍おいて前園がつづける。

「お父さん達にもしバレちゃったら、すごく心配かけちゃいます。それが怖くて。」

ああ、そういうことか。

だけど俺はそれを勧められない。

「いいのか、それ。結局あんた親に言えないってことは、自分で抱え込むってことだぜ？強姦まがいなことされて、その傷をさらけ出せる相手もない。耐えられんの？お前。」

うるたえて何も言えなくなると思ったが、ハズレ。前園の返事はすぐにかえってきた。

「それでも、言いたくないです。」

しつかり、ハツキリ言いやがった。

つかめないヤツ。

俺はなんとなく前園の言い分を否定したくなった。だから否定する。

「できないね。」

「できます」

打てば響くような返事。

「無理。」

「分かんないじゃないですか！」

「どうだか」

「なんであなたにそんなこと決められなくちゃならないんですか！」

だんだんと大声で反論をしてくる。

俺は前園を見る。前園もこつちをみていた。勿論怒っている。だが口を真一文字に結び、目尻にまた涙をためている。

まるで子供の怒り方だ。

否定すんのもバカらしくなるくらいだ。ため息まじりに俺は言った。早すぎる根負け。

「分かったよ。」

「何がですか？」

反抗的に前園がかえす。

「バレたくないんだろ？じゃあバレないように帰してやる」

何言ってるんだろ俺、面倒くさいのに。

前園はおずおずと

「い、いいんですか？」

と驚きの目をしていた。

つきあう俺もそうだけど、コイツ、ワガママなヤツ。思いながら俺は立ち上がる。

「それなら帰るだろ？疲れたから俺もさっさと帰りたいんだ。」
今度はちゃんと手を差し伸べた。

「はい！」

嬉しそうにしっかりと掴んでくる。

そうして前園も立ち上がった。

その後、顔を洗わせ、適当に前園が着ているものと似た服を購入し、彼女の家まで送った。

やはり、前園はお嬢様だったらしく豪華な家だった。金持ちつてのが一目瞭然。俺はあえて玄関口近くまでおくり、心配して出てきた前園の親に姿をみせた。

これで遅れた口実もつくれる。男といたってのはあいつでなんとかするしかない。

それで、俺達は別れた。

16 (前書き)

遅くなりました

夜の帳が囲んでいる。

もうそんな時間か。

とつくに日は沈み、歩行者天国になった通りは、飲みに来たサラリーマンや、帰りに急ぐものであふれていた。

地下一階、地上二階建ての建物の地下にいちするlimeも今は開店準備が進んでいた。万屋の事務所は店の上、しかもlimeが使っていた店の二階部分を借りて使っているから自然、一度limeの中に入らなければならぬ。入るといつても、外扉だけ。すぐに男の写真の額縁が並ぶ地下へ続く階段と万屋へ続く階段に分かれる。俺が建物を眺めていたら、客引きの男がひとり、外扉をあけてでてきた。

「よお！南月！」

「あ、啓一。」

この金髪の男、女みたいな顔立ちでこのホストをやっている。こういう風に会う度に顔をあわせ、気が付いたら話すようにはなっていた。

「仕事？」

「そうだよ、お前もだろ。」

啓一がおおげさに顔をしかめる。

「南月い、お前年下何だから敬語くらい使えよ！あと…制服で入ってくんなよ。バカガキ！」

キシシという笑い。

汚い笑い方だが、顔きれいなだけでさまになるのは不思議なもんだ。制服で、しかもここらじゃ有名な金持ち私学のもの着た奴がこんな

とこ入るのも充分不思議か。

「うるさいな。」

「うはは。」

啓一はまた大げさに、

「あゝまあ気を付けるよその格好。じゃあな。」

夜子さんみたくない女と働くなんて羨ましいねえと去り際にさわやかに言い残し、でていった。

事務所の扉を開けた。

相変わらぬこの場所は仕事をやる場所よりも、レトロな雰囲気のまままっている。なかにあるのはポツンとついにおかれたソファとガラスの机、右隅にカウンターらしきものがある。

この内装はたとえるなら改装中の喫茶店がただしいのかもしれない。しかし変わったことが一つ。

明かりはいつもつかう、薄暗い白熱灯じゃなく、無味な蛍光灯のほうがついてる。さらに夜子の姿がなかった。

そして中に入っていくとちょうどソファの影で見えなかった、白いファイルが見えてきた。

「何だ？もう来たのか？」

「ああ」

俺がファイルをとろうとしたところで夜子がいってきた。

今日は珍しく、タイトのスカートに白いワイシャツ、髪は後ろで一つにまとめた、刑事か教師みないな格好だ。

仕方なしファイルから手を引きソファに座る。

夜子是对にゆつたりと座った。

そして煙草を取り出し、火をつけた。

煙草は嫌いだ。しかし夜子のように、煙草がにあえば許せる。彼女を目だけ爛々としながらこちらをみる。

「そのファイルを見てみる。面白い依頼が来たんでな。南月、君が望むなら、その依頼を受けようとおもっ。」

「へえ、どんなの？」

「見てみれば分かる。簡単にいうと……ただの護衛だかな。」

「護衛？」

耳を疑う。夜子は護衛のような、淡々と行う。工場の作業仕事のよ
うなものは嫌いなはずだ。彼女は好むのは謎があり、危険な、基準
はわからないが、様変わりした仕事が好きだ。
ということによっぽど様変わりした依頼か。

俺が気にいれば、つまり俺自身が知ってることもしくは俺に関係す
る事柄か。

興味がある。

俺はクリップでとめられたファイルをてにとり一枚目をめくった。
現れたのは顔写真。

「これ誰？」

「赤髪、もしくはレッドアイズでときいてる。」

「本名は？」

「……知らないな。」

写真の中の女は一目みただけで日本人じゃないのは分かる。

端正に整った、顔のパーツは日本人のものとは違うつくり、金髪碧
眼ならば西洋でもかなり目を引く存在だろう。

ただ違うのは、その髪と目の色。

そう、髪が赤い。血で濡らしたような髪はそれだけで目立つ。眼は
ワインレッド。それは冷たく、吸い込まれそうな瞳だった。

こいつ、ヤバいな。

直感、本当に直感でそう感じた。

まじまじと見すぎたのか、夜子が急かすように言った。

「次、見てみる。そっちの方が驚くぞ。」

めくる。

あったのは死体の写真。四肢が関節と逆方向に曲がった死体。外傷
がなく出血はない。それがかえって不気味だった。

めくる。

次も死体。

死体と分かるのは胴体だけ、他はまるで潰されたイチゴだった。顔も足も腕も、まるでカツオのたたきのように、なっている。そんな表現、必要ないか。

ただ純粹に叩き潰されてる。

それが赤いペンキの池にほおりこまれた感じ。

次も、次も、次も、次も、骨が突き出し、内臓を引きずり出され、半分に千切れ……

……見てるだけで、吐きそうさ。

「これ、全部その赤髪とかいう奴の仕業？」

「察しがいいな。その通りだ。」

「なんて、猟奇殺人。やりすぎだ。」

「お前が他人のことに口をだすのは珍しいな。」

ファイルを机へ投げ捨てる。

その先は、見ずに。

「で？まさかこんな奴の護衛なわけじゃないんだろ？」

「フツッ、当たり前だ。そいつは殺し屋だよ。まあ、たしかに、赤髪の護衛は面白そうだが、やる意味がないだろう。あの女を守るなんてやるだけ無駄だ。」

「……で、夜子。守るのは誰？」

確かにこの女は異常。コイツだけで、たしかに夜子の好きなタイプの依頼になるが、まさかこんなにスクの高い依頼受けるはずがない。下手すれば俺達がこの写真の仲間入りだ。

俺、次第か。

夜子は試すように薄く笑う。

「……南月、君に関係がもしあったら、気の毒だとおもったからな。一応話は聞いてきたんだ。」

「……それで？」

「護衛の対象者はお前の学校内にいる。」

「……」

俺はその言葉を聞いた瞬間、死刑宣告をつけたみたい^にに体が重くな
った。

何故かは分からない。

「……前園 雛。」

17 (後書き)

見ていただきありがとうございます。

これにて、第一章 瞬花終答 (前) を終了します。

区切りとして、ここで大幅な加筆、修正を加える所存です。

加えて、大変申し訳ないことですが、タイトルを

「白の軌跡」

と変更します。

見ていただいている方には急な変更を深くお詫び致します。

第二章 「奇怪曲線」 は2〜3週間後には再開する予定です。

内容は、「瞬花終答 (前)」の続きです。

では皆さん。

ここまでありがとうございます。

これからも、お見苦しいところもあるかもしれませんが、よろしく
お願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2202d/>

瞬花終答

2010年10月14日23時40分発行